



## 説教要旨「わたしもただの人間です」

使徒言行録 10章 17～33節

「どうして伝道しなくてはいけないのですか」。ある教会の方からそのように質問されたことがありました。“伝道”という、信者でない人を勧誘することだと理解されていることが多い様に思います。けれども友人や知人を教会の礼拝に誘おうと思っても、怪訝な顔をされたり、その後の関係性がギクシャクしそうで、なかなか勇気が必要です。実際に声をかけて断られると、もはや教会や聖書の話題を出すこと自体が怖くなってしまいます。

「どうして伝道しなくてはいけないのか」そう質問された方も、そのような経験をくり返す中で「伝道」が重荷になってしまったのだらうと思います。けれども“伝道”とは、他者を勧誘することではありません。そもそもわたしたちには、誰かを信仰へと導く力など備わっていません。“伝道”は、わたしたち人間が何かをすることによって成し遂げられるものではないのです。そしてそれは、初代教会の指導者であるペトロにしてもおなじことでした。

この使徒言行録の第10章は、表面的に見れば、使徒ペトロによる異邦人コルネリウスへの伝道の様子を記しています。しかしそれは、ペトロが成し遂げたことではないのです。神様が、コルネリウスにペトロを招くよう促し、ペトロに対しても、彼がその招きに応えることのできるように幻を見せました。そこでペトロは、律法で“汚れたもの”とされていたものを受け入れるよう促されました。しかし彼はそれを三度拒否します。ペトロは、自らの“清さ”を保とうとしたのです。神様は、その都度ペトロに「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない」(15節)と言って、彼の頑なな心を解きほぐされたのです。

“伝道”とは、他者を神様に従う者へと造り変えることではありません。むしろ自分自身が、神様に従う者へと造り変えられることを通して、イエス様の福音が伝えられていくことなのです。必要なことはすべて神様が整えて下さいます。わたしたちは驕ることなく「わたしもただの人間です」(26節)。そうやって隣人に仕えていくのです。

(2022・6・12 説教者：稲垣真実)